

英国王室と政治の歴史に探る 日本復活のカギとは

関東学院大学 国際文化学部 教授

君塚 直隆氏

北陸経済研究所 理事長

浅林 孝志



きみづか なおたか
君塚 直隆氏 プロフィール

1967（昭和42）年、東京都生まれ。立教大学文学部史学科卒業後、英国オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ留学を経て、上智大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程を修了し、博士号（史学）を取得。東京大学客員助教授、神奈川県立外語短期大学教授などを経て、現在関東学院大学国際文化学部教授。専攻はイギリス政治外交史、ヨーロッパ国際政治史。

英国王室と政治の歴史

浅林 先般、エリザベス女王が崩御されたことで、英国王室への注目が高まっています。英国は、大英帝国以降衰退したと言われながらも今なお世界での存在感を維持しており、バブル期以降「失われた30年」に苦しむ日本にとって大変示唆に富む国だと思います。今日は、イギリスが一つの主権国家として統合していく礎を築いたとされるヘンリー8世から、大英帝国が栄華を極めたヴィクトリア女王までの時代を、王室にまつわる代表的な人物を中心に辿りながら、それが現在のイギリスにどのような影響を与えているのか、また日本がそこから学ぶべきことは何なのかなどについてお話をお聞きできればと思います。

早速、ヘンリー8世からお聞きしていきたいのですが、ヘンリー8世は宗教改革を行い、イギリス国教会を創始するとともに、修道院を解散させて、その財産を没収してすべて王室に移しました。これにより王室の財政はとても助かったと言われていますが、これがなかったらその後のイギリスは変わっていますよね。

君塚 場合によっては、スペインやフランスの属国になってしまっている可能性も大きかったと思います。彼の長女・メアリー1世がもう少し長生きして、夫でスペインの国王・フェリペ2世との間に子どもが生まれていたら、イギリスは乗っ取られていたかもしれません。（英国王室の系図は11ページ参照）

浅林 その後、紆余曲折があってヘンリー8世の次女でメアリー1世の異母妹であるエリザベス1世が王位に就きました。彼女はたくさんの人に求婚されましたが、誰とも結婚しなかった。それも大きかったですね。

君塚 エリザベス1世が生涯未婚を貫いたのは、彼女の姉・メアリー1世と、エリザベス1世の従妹にあたるスコットランドのメアリー・ステュアートの2人のメアリーの影響が大きかったと思います。メアリー1世はスペインの王様になる人と結婚しました。メアリー・ステュアートはフランスのフランソワ2世と結婚しましたが、夫のフランソワ2世が病死すると彼女はスコットランドへ戻り貴族と結婚しました。しかし、熱心なカトリック教徒だったこの2人はそれぞれイングランドとスコットランド国内

にカトリック対プロテスタントという激しい宗教的対立を生み出しました。エリザベス1世はこの2人を見て、誰と結婚してもだめなのだと思ったのか、戴冠式の時には人間とは結婚しない、イングランドと結婚すると心に誓っていたようです。

浅林 エリザベス1世が生涯未婚のまま後継者を残さず亡くなったことで、メアリー・ステュアートの子であるスコットランド王ジェームズ6世がジェームズ1世として王位を継承し、その後は彼の息子・チャールズ1世が即位します。そして、チャールズ1世の王政への不満がピューリタン革命を引き起こします。

君塚 チャールズ1世の頃のイングランドには常備軍がなく、官僚制もそこまで整っていませんでした。そのようななか、独断で増税を行い、逆らう者を不当に逮捕しようとしたことで議会の反発を受け、彼は殺されてしまいます。当時は王様を殺してはいけないという「王権神授説」という思想があったにもかかわらずです。

浅林 そのピューリタン革命を経てイギリスは王政から共和政へ転換し、クロムウェルが指導者となります。しかし、彼も徐々に軍事的な独裁性を強めていき、彼の死後には再び王政へと戻されます。

君塚 チャールズ1世のような王では困るけれど、その行く末をよくわかっている彼の息子・チャールズ2世であれば二の舞は踏まないだろうと考えられ、彼が王位に就くことになりました。そして、彼に続いて王位に就いたジェームズ2世が名誉革命*1によって失脚すると、彼の娘・メアリー2世が夫でオランダ総督であるウィリアム（ウィレム）3世とともに即位します。

当時のイングランドは、すでにオランダに次ぐ経済大国となっていました。イングランドには自分たちさえ良ければいい、ヨーロッパ大陸のことには関わらなくてもいいという「島国根性」が根付いており、ウィリアム3世はこれを強く非難していました。大陸ではルイ14世が強大な力を振るっているのに、それを見て見ぬふりをするのはおかしいと彼は考えていたのです。ウィリアム3世が王になった

*1 名誉革命：議会在カトリックの復興を強行しようとしたジェームズ2世を追放。ジェームズ2世はルイ14世を頼ってフランスに亡命した。

ことで、イングランドはアウクスブルク同盟に加わります。彼がいなければルイ14世の封じ込めは失敗していたか、もっと手間取っていたと思います。

浅林 ウィリアム3世はイングランド銀行を立ち上げ、国債の発行により戦費を賄うシステムを構築するなど、経済面でも大きな功績を上げています。その後イギリスが大国になるベースをつくったという意味でウィリアム3世の存在は大きかったですよね。

その後、アン女王の時代を経て、ジョージ1世が即位し、後のヴィクトリア女王にもつながるハノーバー朝の時代が始まります。ジョージ1世はドイツ生まれで英語が話せなかったため、彼に代わって国政を担ったのが英国初の首相とも言われるホイッグ党のウォルポールでした。

君塚 ウォルポールは南海泡沫事件*2をうまく収めたことが評価され、首相に就任しました。彼の特徴は体制を築くために多くのお金を必要としたことです。ウォルポールは反対派の人たちを要職に就かせて歳費を与えたり、賄賂を渡したり、爵位を与えたりしながら徐々に懐柔していき、一時期は下院の3分の2が彼を支持したと言われたくらいの巨大な勢力を築きました。また、ウォルポールは体制維持にかかる費用を捻出するために、莫大な費用がかかる戦争は起こさないように気をつけていたとも言われています。

浅林 その後、ジョージ2世を経て、ジョージ3世が王位に就きます。産業革命が始まったのもこの頃ですが、ジョージ3世が王位に就いたのはどのような時代だったのでしょうか。

君塚 この時代には、英国は北アメリカやインド、オセアニアといった地域に進出し、取引を拡大していきます。それらの地域が原料の供給地となり、新たなマーケットにもなり、双方の経済を発展させていきました。

浅林 この時代、お隣のフランスでは、度重なる戦争により国家が財政難に陥り、フランス革命が巻き

*2 南海泡沫事件：スペイン継承戦争の際に戦費を賄うため公債を大量発行し、その利払いに苦しんでいた政府が、公債を買い取らせる目的で「南海会社」という貿易会社を設立。南海会社の株価は発足から半年で10倍にまで高騰したが、やがて暴落し、英国経済に大きな混乱を引き起こした。

起り、ルイ16世が処刑されるなど、かなり混乱した時代でしたよね。イギリスもジョージ2世の時代から戦争が増え、戦費がかさんでいたという点では同じだと思うのですが、イギリスではどうしてそこまでの混乱が起らなかったのでしょうか。

君塚 イギリスでは、いわゆるジェントルマン階級を作ったことがうまく機能しました。ジェントルマン階級の人たちは、中央では貴族院や下院の議員を、地方では治安判事や裁判官を務めながら、いざという時には国のために率先して税金を払ったり、稼いだお金をインフラに投資したり、あるいは彼らの息子たちが軍人になったりして国を守っていました。ジェントルマンたちは「ノブレス・オブリージュ」、すなわち「高貴なるものの責務」というものを肝に銘じており、国民には不満もあったのでしょけれど、いざとなったらジェントルマンが守ってくれるという感覚があったのですね。

19世紀には、下の階級にも選挙権を求める声が高まり、労働者らを中心にチャーティスト運動*3が展開されていきます。すると、労働者にまでは選挙権を付与できないけれども、とりあえずいわゆる下層の中産階級までは選挙権を拡大することになりました。ジェントルマンたちは、そのように下の身分の人たちに対しても柔軟性を示すことで、フランスのような革命を起こさないよう、民衆のガス抜きを行っていたのです。

浅林 そのようなジェントルマンたちの思想を育むうえで、やはり教育が果たす役割が大きかったのでしょうか。

君塚 そうですね。彼らは、パブリックスクールでラテン語やギリシャ語の教育を受け、原語でプラトンやアリストテレスなどを読むことで、王侯がうまく統治をするためには国民に「徳」を示す必要があるということを学んでいました。19世紀当時でもすでに時代遅れだと言われていた教育ですが、長い目でみると、そういった教養を青少年のうちに身につけていたから、大人になってそれをしっかりと体現できたのだと思います。

浅林 ジョージ3世に続いて、ジョージ4世、ウィ

*3 チャーティスト運動：19世紀イギリスで起こった選挙法改正と社会の変革を要求する急進派知識人と下層の労働者階級による運動。1830年から1850年代末までおよそ30年にわたって全国的に展開された。

リアム4世と彼の息子たちが王位に就きますが、残念ながら嫡子には恵まれず、本来は王位に就くはずではなかったヴィクトリアにお鉢が回ってきます。彼女の時代は、イギリスが産業革命を経て「世界の工場」となり、大英帝国が世界の陸地の5分の1を支配したとも言われるなど、華々しい時代として語られることが多いですよ。それを象徴しているのがロンドンで開催された第1回万国博覧会です。

君塚 世界初の万博を成功させた立役者となったのはヴィクトリアの夫、アルバートでした。それまで国内向けの産業博覧会は行われていましたが、いつも赤字で、それを大掛かりにしたら赤字が膨れるだけだろう、そもそも商品も集まらないだろうと、世論は万博に否定的でした。また、ハイパークに会場を造る際にも、有名な楡の木を切ることになるのではないかと、非難が殺到しました。ところが、その会場は今でいうプレハブのような組み立て式だったため終わった後は解体すれば良く、木も切る必要がないため環境への負担も小さいものでした。しかも出来上がったガラスと鉄骨でできた「水晶宮」という建築が大変美しく、それで一挙に盛り上がったのです。結局万博は大成功し、パリをはじめ世界各国に広がっていきました。

浅林 トーマス・クックが世界初の旅行会社を作って成功したのも万博がきっかけでしたね。

君塚 そうですね。また当時は鉄道網の整備も進み、それまでは、特に田舎の人は住んでいる村の近くの大きい街に行くのがせいぜいでしたが、鉄道によってロンドンまで出ていくことが可能となり、本でしか知らないさまざまなものを見ることができるようにもなりました。



浅林 鉄道ができたことで野菜や牛乳も新鮮なものが手に入るようになって、食糧事情も急速に改善されたのですよね。

君塚 そうです。また、19世紀後半には冷凍船ができたことで新鮮な魚が手に入るようになり、イギリス料理として有名なフィッシュ・アンド・チップスもこの時代に誕生しました。

浅林 この時代のイギリスでは技術革新が生活の仕方を大きく変えて、それが世界にも大きな影響を与えましたが、ヴィクトリア女王の時代はそのような華々しさの一方で、景気は常に順調だったわけではないようです。

君塚 ヴィクトリア女王の時代、最初の産業革命によってピークを迎えたイギリス経済は、フランスやドイツなどがイギリスの工業製品に関税をかけたため売れなくなってしまったりする中で、徐々に衰退していきました。

浅林 この頃のイギリスは過剰生産、供給過多でものが売れず、在庫が積み上がり、日本のバブル期のようにいろいろな矛盾が蓄積してきた時期でしたよね。1870年代にはオーストリアの株価暴落の影響も受けていますし、経済的には少し苦しい時期でした。

君塚 そうですね。最初に産業革命が起こったことで、イギリスはいわゆる産業社会の矛盾を世界で初めて経験した国と言えます。景気が悪くなっていくと、チャーティスト運動や反穀物法同盟^{*4}などの運動もどんどん盛んになっていき、そのはけ口として帝国主義に走らざるを得なかったのです。

浅林 ヴィクトリア女王の時代には無理な戦争をたくさんしていますよね。特にアヘン戦争などは、なぜこんなにもひどいことをしたのだらうと思います。当時の議会でも戦争の是非については問題になったと言われていますが、結果的にそれを世論が許したということは、経済的に徐々に衰退し、大英帝国にかつてほどの勢いがなくなってきた中で、国を維持するためには戦争が必要なのだという気持ち国民にあったのでしょうか。

*4 反穀物法同盟：マンチェスターの綿織物業者らが保護貿易廃止を求めて結成した団体のこと。

君塚 そうですね。ジェントルマンたちや産業界出身の人たちの間にそのような思いが根底にあったのだと思います。

エリザベス女王の偉大さ

浅林 少し時代が飛びますが、今回残念なことにエリザベス2世が崩御され、イギリス中が悲しみに包まれています。先生から見てエリザベス女王とはどのような人物でしたか。

君塚 偉大な人物だったと思います。彼女は柔軟性があって、失敗から素直に学ぶところが特に偉大だったと思います。

1997年に彼女の息子、チャールズ皇太子の妻・ダイアナ妃が残念ながら事故によって亡くなってしまいました。彼女は大衆から大変な人気を集めました。実は王室や貴族からはあまり好かれていませんでした。彼女はやはり破天荒でしたから。例えば、チャリティーは慎ましくやるものだというのが当時の王室や貴族の慣例だったのですが、彼女は自分が主役であるかのように着飾ってチャリティー・パーティーへ行くわけです。

浅林 テレビの取材に対し赤裸々に語るなど、従来の王室では考えられないことをたくさんしていましたよね。

君塚 そして、彼女が亡くなると女王はたくさんのバッシングを受けます。女王は時代がもうダイアナ流に変わっていることをそこで理解し、王室も時代に合わせて変わらなければならないということ学んだのです。



浅林 ダイアナ妃の事件をきっかけに、王室も情報発信や広報に力を入れる方向へと変わっていきました。ロンドン五輪の開会式ではジェームズ・ボンドと共演していましたよね。イギリスが国際政治・国際社会の中で地位を保ってこられたのも、女王の貢献が大きかったと思います。

君塚 そうです。例えばブレグジットの時はそうでした。2016年6月に国民投票によってEUからの離脱が決まり、2017年3月に離脱交渉が始まりましたが、当時のテリーザ・メイ首相は離脱が決まるとすぐにバッキンガム宮殿に赴き、女王に王室総動員で加盟国を訪ねるように依頼しました。

ブレグジットは、フランスとドイツに面倒なことをすべて押し付けて逃げたようなものでした。特にメルケルは激怒していて、イギリスから特使が来ても絶対に会わないと、頑なな姿勢を取っていました。そこで女王は、世界的に人気の高いウィリアム王子とキャサリン妃、ジョージ王子とシャーロット王女の一家でドイツを訪問させます。そうやってはさすがのメルケルも会わざるを得ません。そしてウィリアムはメルケルに親書を渡し、あとはすべて随行しているプロの外交官にやらせるわけです。

浅林 そのような政治交渉ができるのが立憲君主政の強みですね。

君塚 共和政には共和政のメリットがありますが、政府や外交官による「ハードの政治交渉」しか手段がありません。しかし、このハードのチャンネルしかない、どうしても衝突が生まれてしまうことがあります。王室による「ソフトの政治交渉」ができることで交渉がやりやすくなるのは間違いないでしょうね。

浅林 エリザベス女王がなくなり、今度は息子のチャールズが国王になりました。先生から見てチャールズはどのような人物でしょうか。

君塚 彼はSDGsという言葉がここまで広まるずっと前、まだケンブリッジの学生だった1960年代には地球環境のことに言及していて、早くから環境問題に取り組んでいます。大西洋の鮭が危ないとか、森林がこれだけ破壊されているとか、皇太子は何を言っているのだと、当時は変人扱いされたそうです。彼は昨年、イギリスのグラスゴーで行われた



COP26（第26回気候変動枠組条約締約国会議）で基調講演を行いました。そのような会議に皇太子が出てくるのは単なるお飾りだと思われる方が多いと思うのですが、各国首脳は彼が環境問題のエキスパートだとちゃんと知っている、みんな真剣に聞いていました。

浅林 チャールズが環境問題に精通していることは日本ではあまり知られていませんよね。COPの話になると、イギリスの産業革命が必ず話題に上がります。そういう意味では、チャールズが国王になって、自らどうやって気温上昇を1.5℃以内に収めるかという話をするのは、とても価値があると思います。

君塚 そうですね。ただ、国王になってしまったので以前ほど自由が利かなくなったのか、今年エジプトで開催されたCOP27への出席は見送ったようです。ウィリアム皇太子も環境保護に貢献した人たちに贈られる「アースショット賞」の設立に関わるなど、地球環境保全に積極的に取り組んでいますから、チャールズ国王の後はウィリアムが継いでくれるかもしれません。

浅林 王室が世界に向けてそのような情報発信を行うというのは、すごく意義のあることですね。

君塚 そうですね。日本でも天皇陛下が水問題にずっと取り組んでいらっしゃるの、もっと発信していただけたら良いと思うのですが、日本では批判が集まりやすいのでなかなか難しいかもしれませんね。

歴史・古典を大事にする英国

浅林 そもそも先生がイギリスの政治史を勉強しよ



うと思われたきっかけは何だったのですか。

君塚 小学校の2年生の時に読んだ子ども向けの伝記が面白くて、そこから歴史が好きになりました。最初はいわゆる漫画形式の子ども向けの伝記から読み始めて、少しずつ高度なものを読むようになり、興味の対象も日本の偉人から世界の偉人へと徐々に広がっていきました。

歴史を学ぶことを決めた直接的なきっかけは、1980年の5月にユーゴスラビアのチトー大統領が亡くなったことです。当時中学1年生だった私は、歴史についてよく知っているつもりでしたが、チトー大統領の名前はそれまで聞いたことがなく、ユーゴスラビアという国がどこにあるのかも知りませんでした。亡くなった時の記事に、「ヒトラーと戦った最後の男」と書かれていて、そこから、ヒトラーやスターリン、チャーチル、ド・ゴールといった同時代の人物たちにも関心を持つようになり、彼らの伝記を次々と読んでいきました。

第二次世界大戦の時期に活躍した人物の中では、特にチャーチルとド・ゴールに興味をもちました。フランクリン・ルーズベルトとスターリンはあまり人間味がありませんが、チャーチルは大失敗もあったけれど、すごく人間味があります。また、チャーチルやド・ゴールは、自分で回顧録を書いているところにも惹かれました。

浅林 チャーチルはノーベル賞も獲っている優れた文筆家でした。チャーチルやド・ゴールの動きをみると、彼らはやはり歴史をちゃんと分かっていたのだらうと思います。

君塚 そうですね。歴史の流れがわかっているから、こうするべきだ、これをやってはいけないということがわかるのでしょうか。ジョンソン元首相も、あ

る意味それが上手でした。彼はチャーチルの伝記も書いていますから、そのあたりを真似ようとしていたのだと思います。

歴史の流れをきちんとつかんでいるから、ヒトラーに迎合したり、ヒトラーに降伏したりするのはおかしいとか、あるいは、ド・ゴールは戦後にアルジェリアの独立問題に直面しますが、独立を与えないのはおかしいとか、そういう選択ができるわけです。

チャーチルもド・ゴールも、そのように歴史の流れをつかんで、その中に自分を置いてみるということが出来る政治家だったと思います。

浅林 歴史を振り返ってみると、国民の意識が変わったときに国の動きも変わっていくように思います。そういった意味ではチャーチルもド・ゴールも国民の意識をガラッと変えて国を動かすということができた人たちでした。

君塚 おっしゃるとおりです。現在、世界ではウクライナ問題や北朝鮮、台湾の問題など、安全保障に関して変化の局面を迎えています。日本もちょうど変化していく必要がある時期なのではないかと思えます。

浅林 歴史を見ていると、日本が生きていく道はこれだということを指導者が国民にしっかりと発信すること、そしてそれを国民が受け止めて意識を変えていくことが、今の日本に必要なのかもしれない。

また、日本は「失われた30年」と言われる長い経済停滞が続いています。そこから脱却して日本がもう一度輝きを取り戻すためには、教育が一番大事ではないかとも言われています。イギリスにはオックスフォードとケンブリッジという世界でも有数の大学があり、その勉強のやり方が今の時代に合っていると高く評価されています。そして今、ハロウスクールが岩手県に日本校を開設し、来年にはラグビースクールも日本にやってこようとしており、日本でも英国式の教育への関心が高まっています。先生もオックスフォードで学ばれたご経験がおありですが、イギリスの教育についてどう思われますか。

君塚 イギリスは歴史を大切にす国です。最初に訪れた時にとても驚いたのですが、イギリスにはワンフロア全部が伝記という書店があります。それは昔の人だけではなくて、ビートルズやベッカムなど、

存命の人のものも含めて、たくさんの伝記が置かれているのです。日本にはそこまでのものはありませんよね。

浅林 さまざまな出来事を歴史としてしっかりと記録に残しておくという精神があるのですね。

君塚 それと同時に、国民に歴史に対するあくなき興味・関心があるのでしょうか。歴史学にはさまざまな学問・学派があって、歴史を動かしてきたのは巨大なシステムだとか巨大な構造だという考え方もあるけれど、イギリスにはやはり最終的には人間が歴史をつくるのだという考えがあり、人間を掘り下げる人文学が大切だと考えられています。今は時代遅れだと言われているかもしれませんが。

それと比較すると、今の日本ではやはり歴史や古典を軽んじている部分があると思います。ヨーロッパにラテンやギリシャの古典があるように、日本には古文・漢文がありますよね。そこには古代の中国や日本の英知が散りばめられていて、中には現代に通じるものがいっぱいあります。やはり古典はしっかり学ばなくてははいけません。

浅林 日本の歴史だけではなく、イギリスやフランス、オランダなどの歴史も幅広く勉強してもらえれば、そこに答えはないかもしれませんが、考えるベースにはなると思います。

君塚 そうですね。「人のふり見て我がふり直せ」とか「他山の石」などのことわざにもあるように、1人の人間として良いところは真似をして、やっではないけなことはやらない、そういうことは長い歴史の中でいくらでも教えてくれていて、外国の歴史を学ぶ意義はそこにあると思います。

浅林 最近、水村美苗さんの『日本語が亡びるとき』という本を読んだのですが、先進国の中でも世界各国の本がここまで翻訳されている国は日本を含めて数カ国しかないのに、その幸せをわかっていない国民が多いということが書かれていました。また、他の国の人たちは原文を読むしかありませんが、私たちは日本語で読むことによって、日本語の文化をそこへ投影しながら読むことができるという話も書いてありました。その幸せを味わわずにただ何となく語学を勉強するというのは違うと思います。

君塚 違いますよ。東洋史、特に中国史の先生がおっしゃっていたのですが、中国の歴史を学ぶときに英語の文献をあたる人が日本人でも多いそうです。しかし、中国史の研究については日本でも百年、二百年と続けられていて、正確な知見の蓄積が本国を凌ぐくらいにあるのです。それだけの成果が日本語で読めるのに、なぜそれを読まないで英語の文献に行ってしまうのかと、中国史の先生たちはもったいないと地団駄を踏んでいます。

浅林 アメリカの作家マーク・トウェインは「歴史は繰り返さないが韻を踏む」という言葉を残しています。歴史でまったく同じ出来事が繰り返されることはないけれど、よく似た事象はしばしば起こるという意味ですが、歴史を振り返り、そこに潜む「韻」を探ることで見えてくる未来もあるように思います。歴史上、エポックメイキングな事象というものはさまざまな要因が絡み合って起こりますが、やはり最も大きいのはカギとなる人物の影響や、技術革新に伴う社会の変化などにより、大衆の価値観が変容することであると考えます。現代を生きる私たちの価値観もコロナ禍で変容を遂げつつあります。その意味で歴史を振り返って自分たちの足元を見直すことが、今こそ必要だと感じました。本日は興味深いお話をお聞かせいただきありがとうございます。



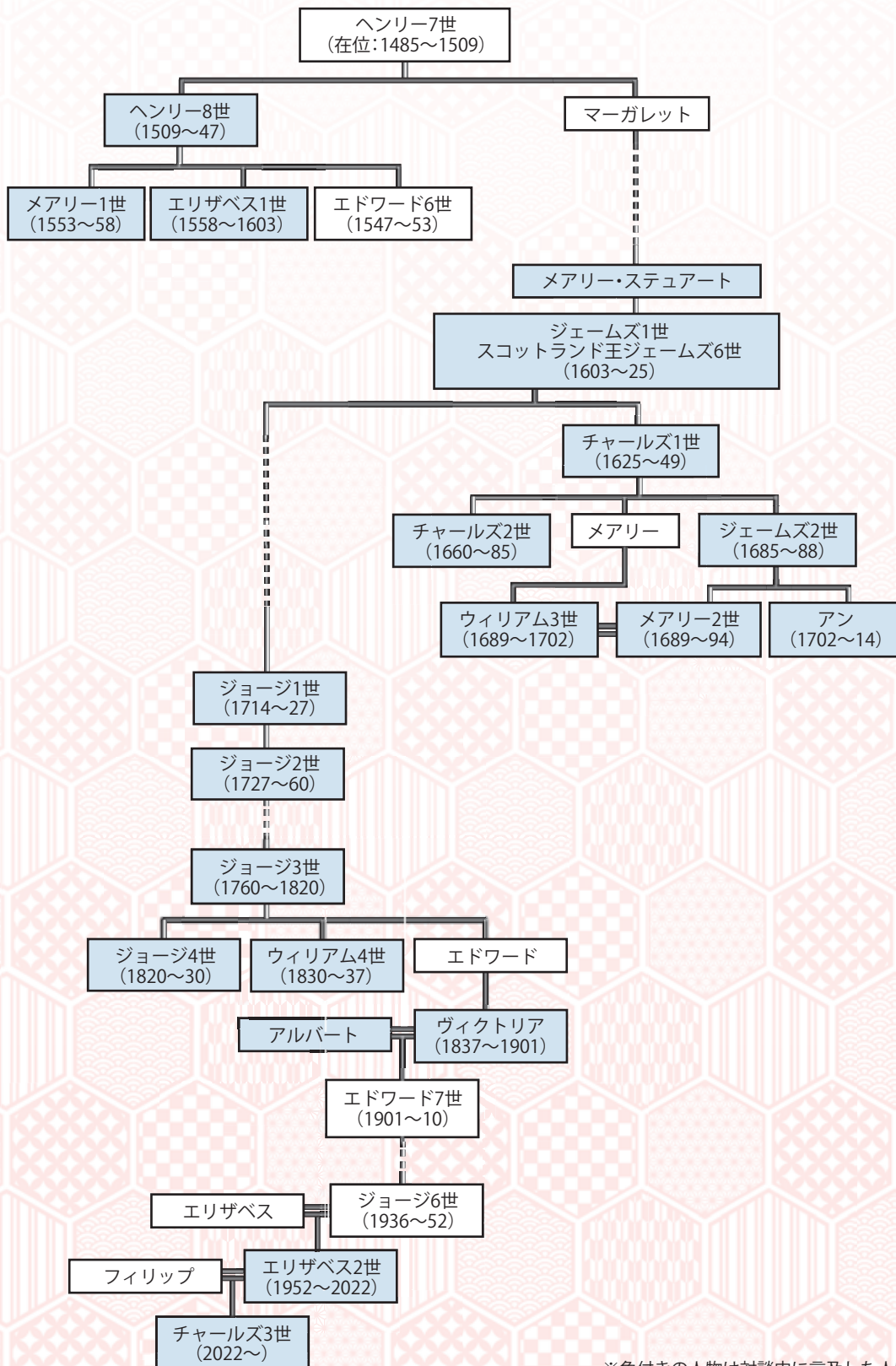
英国王室の系図

テューダー朝

ステュアート朝

ハノーバー朝

ウィンザー朝



※色付きの人物は対談中に言及した人物
 ※特に記載のない限り、在位はイングランド国王
 またはイギリス国王としての在位期間